

## 「分業」および「分業の廃棄」について〔Ⅱ〕

—研究ノート—

中 野 雄 策

### まえがき

- 1 マルクスにおける問題の提起
- 2 問題状況および文献
- 3 分業（あるいは社会的分業）とは何か？
  - § 1 マルクスにおける分業概念の変せん
  - § 2 分業の二面性とその矛盾
  - § 3 協働（Zusammenwirkung）——生産諸力と生産諸関係とのエレメンタールな統一
  - § 4 生産分割と労働分割
  - § 5 分業概念における混乱の歴史的根拠
  - § 6 要約

（以上前稿）

### 4 「分業の廃棄」とは何か？

#### § 1 分業の「運命」をめぐる二つの立場

前稿でかんたんにのべたように<sup>(1)</sup>、ソ連邦における分業論争を通観してみると、そもそも分業概念のもとに何を理解するかでひじょうにことなつた意見をふくんでいるために、共産主義のもとでの分業の「運命」をめぐるてもこれまたはなはだしい対立がみられる。意見の相違は根本的な点におよんでおり、共産主義のもとでの「分業の廃棄」という思想にたいして、一方にはこれを文字どおり肯定する問題提起者の一群があり、他方には議論の仕方に差はあるにしてもけっきょくはこの思想を事実上否定する多くの人々がある。争点が多岐にわたっているのはもちろんであるが、つまるところ論争の核心は、生産過程の全般的な機械化・オートメ化のもとであらわれる労働組織上の変化（なかんづ

くあいことなる労働の転換と結合)によって旧来の分業が除去されるのかどうか、という点にあるようにもおもわれる。

第1の立場は、C・ストルミリン、Д・カイダロフ、B・コルニエンコ、B・エリメエフ、B・パローゾフその他の人々によってかなり鮮明なかたちで展開されている。かれらはいずれも従来多義的なものとして表象されがちであった分業概念のうちから「労働の配分」とか「生産専門化」とかの非本質的な要素をとりのぞくことによって、分業（あるいは社会的分業）をもっぱら諸個人あるいは諸社会集団のあいだに形成される労働関係の独特の形態としておさえ、このような意味での分業の「廃棄」を社会的生産の機械化・オートメ化の必然的帰結としてしめそうとする点において、基本的小なじ立場にたっているといてよい。

ストルミリンは、当時としてはまったくユニークな表現でつぎのように断定している。機械化・オートメ化にもとづく共産主義的生産の内部にはせまい専門的職種にしばられた人間はおらず、分業は「もはや主として人々のあいだにたてられるのではなく、もろもろの機械のあいだに、自動機械や自動化ラインの複合体のあいだにうちたてられる<sup>(2)</sup>」。こうした自動化ラインの作動を管理し調整し再編成するのは、電子工学や制御機器・機構を熟知したあたらしいタイプの労働者たちである。かれらの生産活動のうちでは科学的・創造的性格をおびている知的・精神的諸機能と肉体的諸機能とが結合されている（もちろん知的・精神的機能が圧倒的優位をしめる）ばかりか、かれら自身いくつもの専門的知識と労働諸機能との兼備兼担によって、およそありきたりの「職種」のうちには分類できない幅ひろいプロフィールをしめすのである。「きょうひとつの機能を遂行する労働者たちは、あすは別の機能を遂行するだろう。そしてかれらはみな、学者とか技師とか自動装置調整労働者とかの組織労働という一般化された概念にふくまれてしまい、ある機能から他の機能への移行はいよいよもってとらえがたくなろう<sup>(2)</sup>」。ストルミリンは、1例としてドニエプル発電所における電力生産のオートメ化が発電所職員の職種構成のうえに惹起した根本的变化をあげている。そこでは、1959年にすでにほとんど監視機能だけしか遂行しない労働者が1交替時間中6名をこえなかったといわれる。もっともこのばあい、修理作業がなかば家内工業的におこなわれ、しかも予備部品の供給が十分でないために、修理その他の補助作業にはいぜんとしてかなりの補助労働者を必要とした（ドニエプル発電所の例では176名）。しかしかれは、こうしたオートメ化生産の技術的・組織的欠陥が克服されたあかつきには、この発

電所における生産工程全体に必要とされる職員はわずか2つのグループ——一方では鍛冶工と旋盤工のうでをあわせもっている熟練機械工のグループと、他方では経験ゆたかな電気工事技師のグループ——から構成されることになるし、したがって個々の職員が補助的職種をふくめて3つないし4つの職種を兼担するときには、すでに発電部門で事実上「なんでもできる人間」があらわれることになる、というのである。ストルミリンの論断はこれにとどまらない。かれは、直接的生産過程の技術的・組織的変革が国民経済的規模で滲透してゆくなれば、全労働者階級のあいだでの職種の兼担や機能の転換が発展し、ついには「社会主義諸国のすべてのオートメ化された産業の範囲内での労働者の自由な交替と任意の労働転換<sup>(4)</sup>」さえ結果すると予想している。

カイダロフは、分業概念がどこまでも生きた人間の活動にかかわるものだという理由から、「機械のあいだの分業」というストルミリン独特の表現に反対してはいるが、しかしまた生産の専門化と分業とを質的にことなるものとして区別しつつ共産主義のもとでの職業的分業の消滅を主張する点ではストルミリンと立場をおなじくしている。前稿でのべたように<sup>(4)</sup>、生産専門化と労働分割とを混同してきた従来の分業把握のあいまいさとその由来とをすどく指摘したのは、ほかならぬカイダロフであった。かれは、共産主義社会では、「専門化された生産のあたらしい種目が発生し確立してゆく<sup>(5)</sup>」と同時に他方「分業の内部ではこれに対立する過程がはじまり、発展する<sup>(5)</sup>」とのべている。すなわち、生産専門化をどこまでもおしすすめる機械化とオートメ化技術そのものが、労働者たちの生労働の諸機能をせまい枠のなかにとじこめると同時に、かれらの教育・文化水準の上昇を要求し、このことがけっきょく労働者たちに「いくつもの専門を修得する可能性をあたえ、……さまざまな労働種目を順次遂行する可能性をあたえる<sup>(6)</sup>」とみるのである。現代的な自動化ラインはいくつもの機械をふくんでおり、さまざまなオペレーションを必要とするのであるから、自動化ラインを操作するオペレーターたちはいまやひとりびとりがラインにくみこまれた各種の機械および各種の必要オペレーションを知悉していなければならない、つまり全技術工程を知りつくしていなければならないことになる。カイダロフは、労働者たちの生産生活におけるプロフィールをこのように拡張するための物質的・技術的前提として、「自動化設備の多くの構成要素、ライン結節(узел)および技術学的パラメーターの共通性<sup>(6)</sup>」をあげている。かれはさらに、機械化された生産技術のうち全般にみられる技術学的普遍性(この普遍性は、大工業技術の必然的産物としてマルクスが指摘したものである)を現代的自動機械にあてはめて、つぎの4つの共通機構を抽出して

いる<sup>(7)</sup>。現代的自動機械は、たとえそれがどんな生産部門でどのような生産的目的のもとに用いられようとも、機械的、水圧気圧的および電氣的な技術にま

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 主として回転運動の伝達に用いられる機械的機構</li> <li>2 前進運動の伝達に用いられる水圧機構</li> <li>3 回転をはやめるための気圧機構</li> <li>4 自動管理・制御のための電氣的機構</li> </ol> |
|---|

められるということ——こうしたオートメ化生産の生産技術的共通性こそは、「幅ひろい生産上のプロフィールをもつ労働者たちの養成と、かれらの多面的な普通教育と技術教育のための物質的基礎<sup>(8)</sup>」であり、職業的専門化から職種兼担への、さらには分業から労働転換への移行の客観的前提をなすものだ、というのである。

コルニエンコのばあいは、生産分割とはことなるものとしての労働分割（＝分業）をもっぱら「職業的」分業としてとらえる点で、ストルミリンやカイダロフよりもずっと徹底している。コルニエンコによると、職業的分業は他の分業形態とならぶ特殊形態ではあるが、同時にあらゆる分業がこの分業形態を介して存在し表現されるという意味において、これを具体的普遍として規定する<sup>(9)</sup>。そしてこのようなものとしての職業的分業は、社会主義社会をふくむ歴史的発展の特定段階においてのみ生産諸力の形態となっているが、共産主義社会の高次の段階では（職業的分業そのものが消滅するのであるから）生産諸力の発展は分業以外のものをつうじておこなわれ、分業なしに表現されることになるという。なぜなら、「共産主義的生産が前提する高度の技術発展水準のもとでは、……企業内部だけでなく、諸企業のあいだでも、労働分割は機械の諸機能のあいだの分割に席をゆずり、……生産だけでなく機械の管理もまた機械の助けで実現される……<sup>(10)</sup>」からであり、「さまざまの生産部門のあいだの分割は、自動的に作動し管理される各種の機械の複合体のあいだの分割としてあらわれ、もろもろの人間集団のあいだの分割としてはあらわれない<sup>(11)</sup>」からである。それどころか共産主義的生産の内部には、およそ「孤立した生産的労働集団なるものは存在しない<sup>(12)</sup>」のである。ところで分業にかわってあらわれ、生産諸力発展の形式となるものはなにか？ このばあいにもやはり労働転換法則なのである。コルニエンコによると、この法則は、生産の機械化・オートメ化の進展にともなって、はじめは分業法則とならびかつそれとあいおぎな

うものとして存在するが、のちには分業法則を排除することによって排他的に作用しはじめる。だから「労働転換法則は、さまざまな生産過程のあいだに労働を配分する第2の形態<sup>(9)</sup>」ということになる。さらにコルニエンコは、多職種兼担が普及するための前提諸条件として、(1)各種生産過程の共通性の増大、(2)生産の技術的条件の発展によって生産手段にたいする労働者の依存度が減少すること、(3)労働日が決定的に短縮すること、(4)労働者が普通教育や技術教育をつうじて多面的活動種目を修得すること、——この4つをあげている。

エリメエフは、従来分業の名のもとに理解されていた内容をふたつの側面にわけ、一方を「人間活動種目の自然史的分化 естественной исторической дифференциация видов человеческой деятельности<sup>(10)</sup>」あるいはたんに「自然的労働分割 естественное разделение труда<sup>(11)</sup>」とよび、他方を「人々のあいだの労働分割 разделение труда между людьми<sup>(12)</sup>」とよんでいる。かれによると、前者は「人間活動種目の質的分化を表現し、種々の労働形態の共存と労働の配分とを反映している<sup>(13)</sup>」が、後者は「一定の歴史的条件のもとで個々の人間および社会集団全体が特定の活動形態に固着すること、かれらの活動がなんらかの就業部面にだけかぎられていること<sup>(14)</sup>」を意味するのである。そして、前者が労働の専門化、人間活動の質的分化といういわば自然的性質をもっているかぎり、共産主義社会の高度の段階でも存続するのにたいして、後者つまり人間の専門化は、共産主義的生産の発展につれて消滅し、ついには労働の集積と転換にもとづく人格の普遍的発達によってとってかわられる、と考えられている。しかもかれは、「あい対立する現象の一方がとりのぞかれることは、この現象そのものの除去にはほかならない<sup>(15)</sup>」という理由から、共産主義のもとでの分業の絶滅を結論するのである。\*

\*このほかほぼ同様の方向での主張をのべたものに、Г・コズロヴァ、Э・ファインブルク、Г・シェメネフ、Ким・セルゲエフ、Н・ハイキン、Л・セメノフ、А・クドリャフツェフ、Д・メーリニク、И・スード、А・ロヂーギンなどがある。(文献については、前稿2節参照)。そのうちふたつだけを以下要点のみ引例しておこう。

コズロヴァ、ファインブルク——機械化された生産における労働者は、(1)オペレーター、(2)補助労働者、(3)編成工(Наладчик)、(4)修理工、の4つのカテゴリーにわかれる。生産オートメ化の進展にともない、まずオペレーターの管理機能が自動制御機能に吸収され、ついで原材料の装填と製品とりはずしの機能が機械化されると、けっきょくオペレーター自身がまったく不用となる。だからオートメ化生産における労働者の主要カテゴリーは編成工であり、この職種(もはや本来の意味での職種ではない)における労働は、経験よりはむしろ科学技術上の理論的・实际的知識にもとずいて機能するとこ

ろの創造的精神労働であり、ある部門から他部門への、ある専門から他の専門への内面的移行を固有のものとしている<sup>(44)</sup>。

シェメネフ——共産主義的生産のもとでの生産技術工程の完全オートメ化は、企業や生産部門をまるまるとらえるだけではない。オートメ化された労働手段の機能上の密接な連関と相互作用は、全国的範囲で生産装置をとらえ、さらには一連の社会主義諸国をふくむ生産、エネルギー、運輸などの単一の体系をつくりあげるにいたる。人工原材料と新エネルギー源に立脚しておこなわれる物質的生産のこのような体系を正常かつ計画的に機能させることは、すくなくとも一国全体の規模で長期的展望のもとにきわめて多様な技術的・経済的・社会的ファクターの科学的計算と分析を要求する。共産主義的生産は科学にもとずいて発展するようになるし、生産はもはや自然科学、技術学、経済学などの産業的応用となるだけでなく、それ自体が新発見をもたらす科学活動であり、科学実験であるという特質をおびてくる。共産主義的生産における科学と生産とのこうした結合によって、「歴史的に形成された分業はしだいに払拭されてゆくだろう<sup>(45)</sup>」。なぜなら、「科学的研究と生産においてそれを実際に応用することを有機的に結合することは、国民の職業的専門化を消滅させる根本条件をなしており」<sup>(46)</sup>、この結合がおこなわれるときには「労働活動においてもちいられる労働の熟練と知識とを職業上の熟練や知識に還元することはもはや不可能である<sup>(47)</sup>」からである。

以上のようないわば「分業絶滅論」にたいして、共産主義のもとでの分業の存続を主張する人々の議論のいくつかを引例しよう。かれらの議論の仕方は、もちろん一様ではなく、なかにはかなりあいまいな折衷論もみられる。まずもっともはっきりした「分業存続論」をのべたのは、A・アンドレーエフとЯ・チモシコフである。かれらはずぎのようにのべている。「ひくい社会構成体からたかい社会構成体へ移行しつつある社会の生産力の発展は分業の発達にもとずいている。生産力の発展を分業の発達なしに、いっそうせまくふかい人間の専門化なしに表象することはできない。……したがって生産力の嵐のような発展によって特徴づけられる共産主義社会にとっては、分業の絶滅についてかたることはできないし、共産主義社会の人間を各種の労働形態をかわるがわる遂行するものとして表象する空想的シェーマへの移行についてかたることはできない<sup>(48)</sup>」。かれらによると、自然科学の最新の成果の技術学的応用が労働組織のうえに結果するのは、分業の深化であって労働転換法則の作用ではない。どだい「マルクスは、そんな法則をたてはしなかったし、ただ資本制生産において観察される仕事の交替を指摘しただけ<sup>(49)</sup>」であり、また共産主義的分業は肉体労働と頭脳労働とを同一人のうちに結合した専門家のあいだに形成される、とはなはだ断定的に論じている。

B・モスコヴィチのばあいには、生産の総合機械化とオートメ化の進展にともなう個別企業内の多職種兼担が否定されてはいない。しかし、この傾向は、労働者の職業的分化そのものの克服過程をしめすものではなく、むしろあたらしい職業的分業の形成を意味するものと考えられている。すなわち、企業内部のせまい技術工程を表現するところのふるい職種の分化にかかわって、就業分野の区別に立脚するあたらしい職業的分業があらわれる、と考えられている。モスコヴィチはこの点をつぎのようにのべている。「問題は、労働者の職業構成の発展に影響するのは、生産諸力発展の程度と性格であり、それに対応する労働者の技術装備であり、生産の部門構造である、という点にある。だから、たとえば総合オートメ化が拡大深化して、企業内の分業が自動機械体系を管理する労働者たち（たとえば編成工たち）の単純協業の性格をもつほどになったとしても、生産の部門構造の発展が職業的分業の発達を条件づけることはさげられない<sup>(9)</sup>」。あまつさえ共産主義のもとでの自然の認識と利用の無限の地平のうえにあらわれるあたらしい知識分野とあたらしい生産部門を考慮にいれるならば、あたらしい職業がいつそう拡大してゆくことはさげられないと予測している。もともとモスコヴィチにおいては、分業法則と労働転換法則とは相互に対立し排除しあうものとしては理解されていないのである。かれにあっては、一方では個々の生産部門や就業分野のあいだでの分業法則の恒久的作用が予測されているが、他方では個々の企業や就業分野内部で発展する多職種兼担や労働転換の傾向は否定されておらず、そのかぎり職種の細分化が克服されてゆくと考えられている。労働の分割と転換とは対立するどころか相互に前提しあい補足しあうものであり、いいかえれば、労働の転換と労働者の多面的発達を内包するような職業分化という点にこそ共産主義的分業の独自性をみとめるのである。すなわち、「共産主義における生産者の職業的専門化のこの特徴がまさに労働転換法則の自由な作用の諸条件をつくりだす<sup>(10)</sup>」、あるいは「共産主義のもとでの労働の（したがって生産者の）専門化という事実が社会的分業法則の作用を条件づけるとすれば、共産主義のもとでの労働専門化の性格、労働専門化の内容がいまひとつの法則——労働転換法則——の作用を条件づける<sup>(11)</sup>」ということになる。

シゴフはそもそも社会的分業を生産分割とは区別されたものとしての独特の労働関係として把握するカイダロフやコルニエンコなどに反対して問題を論じているのであるが、このことから必然的に「それぞれ所与の時点をとれば、いかなる労働者も生産体系においてなんらかの地位をしめており、特定の職務を

遂行する<sup>(9)</sup>」という結論をひきだしている。いかえれば、だれでも生産のすべての部面に同時に存在することはできず、すべての（あるいはいくつかの）生産活動に同時にたずさわることは不可能であるから、各時点をとってみれば労働者のあいだにはまったく特定の分業関係が生ずるということである。そして問題になりうるのはただある時点で設定された分業関係の「継続時間」だけである、というのである。シゴフによると、人類史の最初期をのぞいてひきつづき存在した労働分割は、人間による自然認識の拡深と限界のある人間の生産的経験とのあいだの矛盾に由来するのであり、機械制大工業のもとでもそれ相応の特徴をおびながら存続する。たとえ生産のオートメ化・電化・化学化とともに職業や職種の内容が労働者の筋肉的・身体的熟練によってではなく生産管理のための精神的活動によって規定されるようになったとしても、そしてまたこのことが具体的労働種目の差異や職種のあいだの限界の払拭の傾向をとともなうとしても、この過程が「単一の普遍的な具体的労働種目<sup>(10)</sup>」を生みだしたり、各種の生産種目に役立つ「単一の普遍的職種<sup>(11)</sup>」をつくりだしたりするということがいったいありうるのだろうか、と反問するのである。とくに現代的生産において多岐にわたる専門知識とむすびついた科学技術的労働が決定的役割を演ずることを考慮するならば、なおさらそうなのである、と。

マネヴィチは、共産主義社会があらゆる種類の分業に終止符をうつと考えるストルミリン、コルニエンコ流の構想をユトピアであるときめつけ、つぎのように反論している。「人間が『労働転換法則』のおかげである職業から他の職業へ（科学の仕事をふくめて）移行するだろうという考え方は、すくなくとも熟考されたものではない。科学にたいしては全生涯がささげられなければならない、残念ながら全生涯といえども……不十分である。このことが明白なのは、科学においては強力な専門化の過程が進行しているからである。現代の科学者はいよいよもって小さい知識分野でますます多くのものを知っている<sup>(12)</sup>」。「なんらかの知識分野で学者となるためには、まずもって自分の研究領域をできるだけ限定しなければならない。ますますあたらしい知識分野と専門が分離されてゆくたえまない過程が進行するのには理由がある。さまざまな国の偉大な学者によってすでになされたことを知るためにだけでも、たとえそれがなにかひじょうにせまい問題であったとしてさえ、多くの時間と精力をついやさなければならず、他国語の研究や無数の原典の読破研究のためにもそうである。だから共産主義社会の人間が異常にかんたんにその職業を変更する——たとえば、きょうは物理学のある分野での学者であったが、あすは化

学，医学，生物学，経済学，人種学などの学者になる——などとまじめに考えることは困難である<sup>(8)</sup>」。マネビッチは，社会的活動の他の分野でも同様の理由によって永続的専門化の肩をもっている。芸術的創造の分野では，たとえば人が音楽家，演奏家，作曲家，画家などとして社会的承認をうけようとすれば多大の時間と努力と才能を必要とするし，物質的生産の分野では，生産諸力がどんなに発展しても，オートメ化生産がどんなに定着したとしても，ことなつた生産部門の技術・技術工程・生産組織（したがって労働）のうちにはいぜんとして著大な相違がのこる，ということは経験がしめしているというのである。そしてこうした経験以外のいかなる経験をもわれわれはもたないし，「（現実感覚をうしなつた人間になるまいとすれば），人々のあいだのあらゆる分業の終末，したがって共産主義のもとでの働き手の専門化の終末を公言する経済学者や哲学者たちの見地に同意するわけにはいかない<sup>(9)</sup>」というのである。\*

\*ほかに共産主義のもとでの分業（とりわけ職業的分業）の文字どおりの廃絶という思想に反対する論陣をはつたものに，И・ズデュレフスキー<sup>(10)</sup>，А・クリレフ，Л・マスコフ，И・クラコフ，Н・ノヴォセロフ，В・スホムリンスキー，В・ペロゼルツェフ，В・フォミナ，Э・ストリガチェヴァ，А・ポポフ，В・ネムチェンコ<sup>(11)</sup> などがある（文献については，前稿2節の注(8)，および本稿§1の注(10)を参照せよ）。

以上に引例した諸見解とりわけアンドレエフ＝チモシコフ，モスコヴィチ，シゴフ，マネヴィチなど）についてはのちに検討する予定である。だがその前に批判の前提となるべき基本的問題を独自に考察しておかなければならない。それは，つぎの諸点に集約される。

- (1) マルクスは，資本主義的大工業の分析をつうじていわゆる「労働転換法則」を定立したのか否か？
- (2) オートメーションを基軸とする現代的産業技術は，人間の労働および労働組織のうえに何をもたらすか？
- (3) ソ連邦における労働転換法則の具体的作用形態如何？

以下この3点について順次とりあげてゆく（ただし第3論点は次稿にゆずる）。

- (1) 「分業」および「分業の廃棄」について〔1〕，山口経済学雑誌，第16巻第1号，34～35ページ参照。
- (2) С.Струмилин，На путях построения коммунизма，1959，стр.12～13. или Проблемы социализма и коммунизма，1961，стр.296
- (3) С.Струмилин，Коммунизм и разделение труда，вопросы философии，

No.3, 1963, стр.44

アメリカ合衆国において発電所オートメ化にともなう労働組織上の変動過程を調査したつぎの事例は、この点で大いに興味をひく (Floyd C. Mann and L. Richard Hoffman, Automation and the worker, a study of social change in power plants, 1960, 邦訳, 労働とオートメーション, 日本能率協会, 1961年)。調査対象となった新旧発電所の職種構成をみると、オートメ化以前の旧発電所では、(1)ボイラー、(2)タービンとコンデンサー、(3)電気関係、の3つの機能を遂行する運転グループから構成されていたが、オートメ化された新発電所では、ボイラーとタービンの知識を兼備したオペレーターと配電盤オペレーターとの2つのグループがあらわれ、さらにこの両グループの結合によってただ1種類のオペレーターすなわち発電所オペレーターがあらわれた。そしてもっとも熟練度の高いA級発電所オペレーターは、いまや発電所のすべての制御ステーションに非固定的に配置され、「全発電工程にたいして責任をもつことになった」といわれる (邦訳, 82~84ページ参照)。

- (4) 山口経済学雑誌, 第16巻第1号, 55ページ参照。
- (5) Д.Кайдалов, Разделение труда в настоящем и будущем, Вопросы экономики, No.9, 1961, стр.43.
- (6) Д.Кайдалов, Строительство коммунизма и совершенствование форм организации труда, Социалистический труд, No.11, 1959, стр.35.
- (7) Д.Кайдалов, Коммунизм, труд и человек, 1960, стр.55. 総合的な機械化とオートメ化のもとで発生する生産技術および労働者の熟練と知識における共通標識を, Д.メルキン, М.ロズネヴェは, つぎの5点にまとめている (См. О подготовке рабочих широкого профиля в машиностроении, Социалистический труд, No.10, 1962, стр.48)。(1)労働過程において同質の器具, 機械化手段, 装置, 機器, 施設が使用されること, (2)同質の原材料 (金属およびその合金, プラスチック, 鉱物油, 触媒その他の物質) が使用されること, (3)現代的自動装置の制御, 調整, 分解, 組立, 据付, (4)機械的ドキュメンテーション (製図, 運動回路図, 水路図, 電気回路図) が利用されること。
- (8) См. В.Корниенко, Общественное разделение труда в период перехода к коммунизму, 1963, стр.23
- (9) В.Корниенко, Общественное разделение труда при социализме, Сборник статей кафедры политической экономии, Научные труды Ленинградского института точной механики и оптики, вып40, 1958, стр.61~65
- (10) В.Корниенко, Общественное разделение труда в период перехода к коммунизму, 1963, стр.73
- (11) там же, стр.86~101
- (12) См. В.Ельмеев, Коммунизм и развитие человека как производительной

силы общества, 1964, стр.138~154

- (13) В.Ельмеев, Всестороннее развитие личности предполагает уничтожение разделения труда между людьми, Вопросы философии, No.10, 1962, стр.29
- (14) См. Г. Козлова и З. Фаинбург, Изменение характера труда и всестороннее развитие человека, Вопросы философии, No.3, 1963, стр. 56~57
- (15) См. И.Шеменев, Связь науки с производством и всестороннее развитие личности, Вопросы философии, No.3, 1963, стр.30
- (16) А.Андреев и Я.Тимошков, Разделение труда и общественные группы при коммунизме, Вопросы философии, No.10, 1962, стр.42
- (17) В.Москович, Общественное разделение труда при социализме, 1966, стр.32
- (18) Там же, стр.34
- (19) И.Сиг'ов, Разделение труда в сельском хозяйстве при переходе к коммунизму, 1963 стр.242~243
- (20) Там же, стр.244
- (21) Е.Маневич, Социально-экономические основы всестороннего развития личности при коммунизме, Вопросы философии, No.10, 1962, стр.36
- (22) Е.Маневич, О ликвидации различий между развернутого строительства коммунизма, стр.25
- (23) Там же, стр.26
- (24) И.Судеревский, Общественное разделение труда в период развернутого строительства коммунизма, Социалистический труд, No.1, 1963  
В.Немченко, Общественное разделение труда, Коммунист, No.16, 1966

## § 2 機械体系と労働転換法則

アンドレエフやチモシコフの断定するように、マルクスは「労働転換法則」などというものを定立しなかったのだろうか？ いや、マルクスによる機械制大工業の分析を全体として読みとるならば、そのような断定が不可能であることがわかる。「資本論」第1巻第4篇において膨大な材料をもちいて論証されたのは、たんに資本による相対的剰余価値搾取のメカニズムだけではない。そこには、大工業のもとで作用しはじめる「社会的生産法則」（＝労働転換法則）の発生の物質的基盤およびこの法則がもつ原理的意味の解明、この法則がも

たらず社会的諸結果の分析が、1本のたて糸としてつらぬいている。これは否定できない事実である。それにもかかわらず、この法則は従来あまり注意されず、とくにわが国の「資本論」研究においてはほとんどまったくかえりみられなかったといつてさしつかえない<sup>(1)</sup>。

マルクスは、道具から作業機への労働用具の転化とともにあらわれる機械体系を大工業の技術的基盤としてとらえ、このあらたな労働手段が人間の労働と労働組織のうえにおよぼす革命的影響をあきらかにし、けっきょくはそれが生産諸力の全体系を根本から再編成するとともに、つねに全生産の主体である人間そのものの変革をよびおこすものであることを洞察している。

機械体系の発達史(=産業革命)を要約しつつ、そこからマルクスがひきだした結論の第1は、機械の3環体系(原動機、伝動機構、作業機)の出現によって、かつて人間の筋力に依存していた生産における遂行、制御およびエネルギー機能が機械体系そのものによって代位される、ということであった。伝動機構の導入は、労働と労働対象(人間と自然)とを結合する鎖をひきのばし、人間の生産活動範囲を人間個体の肉体的限界をこえて拡張する。多くの作業機を制御する伝動機構はもともと「ひとりの労働者の使う手工業道具をせまく限っている有機的な限界から……解放されている<sup>(2)</sup>」のであるが、この伝動機構の導入にもとづく作業機の多様化と巨大化がこんどは必然的に従来の狭隘なエネルギー基盤と衝突して、あたらしい動力——蒸気エネルギー——の産業的応用への道をきりひらき、かくして生産者としての人間から相対的に自立化した自己運動体としての機械の3環体系を成立せしめたのである。

第2の結論は、マニュファクチュア経営と機械経営とでは、生産過程における主体(労働者)と客体(労働手段)との地位と役割とが逆転しているということであった。「機械にあつては、労働手段の運動と働きとが労働者にたいして独立化され、……労働手段は、それ自体として、ひとつの産業的恒久運動機構(perpetuum mobile)となる<sup>(3)</sup>」。ここから、マニュファクチュアでは生産過程がすべて主体(労働者)の側からはじまるのにたいして、機械経営のばあいには客体(労働者)の側で客観的に進行する過程に主体(労働者)が配置され適合させられる。マニュファクチュアでは「社会的労働過程の編成は純粹に主観的であり、部分労働者の組み合わせである<sup>(4)</sup>」のにたいして、機械経営は「まったく客観的な生産有機体<sup>(4)</sup>」であり、労働主体はみずからの外部に自立化したこの有機体を既成の物質的条件としてみいだすことになるのである。

第3の結論は、このような生産過程の客体的条件(労働手段)の自立化と巨

大化につれて、「総過程が客観的に、それ自体として考察され、それを構成する諸段階に分解される<sup>(5)</sup>」ということであり、マニュファクチュア経営における「主観的な分割原理<sup>(5)</sup>」から「生産過程の真に科学的な分解<sup>(6)</sup>」への分割原理の移行が生ずるということである。この移行によって、マニュファクチュア分業の根底におかれていた労働過程の細分化が客観的な基礎を獲得するにいたるのであるが、このことは人間の協業および分業にかわって（あるいはそれとならんで）機械の協業および分業が出現することを意味する。労働分割（人間の専門化）としての分業概念を機械体系や技術工程の構造に適用できるかどうかは、たしかに問題である。しかしこれがたんに比喩的な表現にすぎないとしても、「人間の分業から機械的分業へ」というシェーマは、機械制大工業が生産諸要因の相互関係のうちにもちこんだ本質的変化の核心にふれるものである。マルクスはこのことをつぎのように明確にのべている。「工場では、すなわち機械経営にもとづく作業場では、つねに単純な協業が再現するのであって、しかもさしあたりは（ここでは労働者のことは問題にしない）同時にいっしょにはたらく同種の作業機の空間的集合として再現するのである<sup>(7)</sup>」。これにたいして、「本来の機械体系がはじめて個々の独立した機械にかわってあらわれるのは、労働対象が多くのたがいに関連する異種の段階過程を通過することになり、これらの段階過程が種類はちがうがたがいに補足しあう諸道具機の一連鎖によって遂行されるばあいである。ここでは、マニュファクチュアに固有な分業による協業が再現するのであるが、しかしこんどは部分作業機の組み合わせとしてである<sup>(8)</sup>」。

マニュファクチュア経営から機械経営への移行につれて生ずる生産有機体の巨大化および労働主体にたいする労働条件の独立化、その結果としての分業原理の変化（人間の分業から機械的分業へ）——このような基本思想は、しかしさしあたりは「労働者のことは問題にしない<sup>(9)</sup>」でのべられたものである。そこで、いったいこうした移行が労働者の側で（労働組織のうえに）どのような変化を惹起するのかが問題となる。

第1に、機械経営では労働過程の協業的性格が最高度につよめられる。大工業に固有の労働手段と労働者の集積およびそれにとまなう直接生産過程の規模の拡大は、協業（Kooperation）の本質——労働における社会的連関の直接的顕現——に対応しており、したがって大工業の発展は必然的に協業の規模を拡張し、協業関係の固定性をつよめずにはおかない。「機械は、……直接社会化された、すなわち共同的な労働によってのみ機能する<sup>(10)</sup>」のであり、機械に

もとづく「労働過程の協業的性格は、……労働手段そのものの性質によって命じられた技術的必然となる<sup>(40)</sup>」のである。機械経営において社会化された共同労働者による孤立した個別的労働者の全面的駆逐がみられるのは、このためである。——協業としての協業の完成。

第2に、しかし、マニユファクチュアにおける協業の独自の形態である分業（＝複雑な協業）にかんしては、事態は根本的にことになっている。機械経営においては、かつて手労働の技術的基礎をなしていた「道具」があたらしい技術的手段（＝機械体系）の成分（＝作業機）として吸収され、その結果、労働主体と労働手段との直接的連関がたちきられ、手労働自体に所属していた各種の作業遂行機能は、機能遂行上の技能や熟練とともに、あらたな労働手段（＝機械体系）のうちに移されてしまうのである。かくして、一方ではマニユファクチュア分業の技術的基礎が廃棄されるとともに、他方では手工業的労働自体が廃棄される。機械体系はもともとそのすべての成分について、すなわちその動力的基盤についても、伝動機構についても、作業手段についても、労働者の肉体的限界や個体的特質から原則的に解放されており、独自の客観的定在を与えられている。このことによって、機械体系およびそれにもとづく技術工程の分割もまた客観的であり、それ自体として実現しなければならず、また実現するのである。いいかえれば、機械体系と機械的技術工程の分割は、もはや人間の側での作業過程の分割をともなわず、それとかかわりなく、つまり「分業による分析<sup>(41)</sup>」によって媒介されることなく、自然諸科学の技術学的応用によって実現される必然性と可能性があらわれるのである。

この点についてマルクスはつぎのようにいう。「自動的な工場のなかで分業が再現するかぎりでは、それは、まず第1に、特殊化された機械のあいだに労働者を配分することであり、また、労働者群といっても編成された組をなしてはいない群を工場の種々の部門に配分することであって、そこでは、これらの労働者群は並列する同種の道具機について作業するのであり、したがって、これらのあいだでは単純な協業がおこなわれるだけである<sup>(42)</sup>。」「全機械設備そのものが、多様な、同時にはたらく、結合された諸機械の1体系をなすかぎり、それにもとづく協業もまた、各種の労働者群を各種の機械のあいだに配分することを必要とする。しかし、機械経営は同じ労働者を同じ機能に永続的に適合させることによってこの配分をマニユファクチュア的に固定する必要をなくしてしまう<sup>(43)</sup>」。

ここからわかるように、マルクスは、発展した機械経営としての自動工場に

おける労働組織は、機械体系の種別（同種か異種か）がどうであれ、いずれにしてもマニファクチュア型の分業を排除するとかんがえていた。自動工場において「特殊化される」のはもはや労働者ではなく機械体系なのである。もしこの機械体系が「同種」機械の体系であるならば、機械の単純協業が形成され、これに対応して個々の労働者や労働者群のあいだでも単純な協業がおこなわれる。これにたいして「異種」機械が並存し相関連して作動しているならば、機械の側での複雑な協業（＝分業）と労働者の側での単純協業とが対応することになる。なるほど後者は、労働者（あるいは労働者群）のある種の配分（Verteilung）をとまなうであろうが（そしてこの「配分」にたいして分業概念を適用できるかもしれないが）、しかし肝要なことは、このばあいにはすでに個々の労働者や労働者群を特定の機械や作業種目に多少とも永続的にしぼりつける必要が、機械化された労働過程そのものの本性（直接社会化された共同労働）によって原理的に排除されているということである。自動工場における異種機械への労働者（労働者群）の配分は固着性をうしなっており、その意味において分業の本質的特徴を欠いているといわなければならない。——分業としての協業の廃棄。

第3に、機械経営の発展が労働組織におよぼす本質的影響として、生産的労働者における仕事の交替＝労働転換への法則的傾向をあげなければならない。この傾向は、労働者にたいする労働手段の独立化、生産と労働の集積と社会化、労働の性格と内容における「均等化または水平化<sup>(4)</sup>」、直接的協業の強化および機械のあいだでの協業と分業、等々にみられる大工業生産のもとでの一連の根本的変化の集約であり、むしろその積極的発現である。仕事の交替＝労働転換の必要性は、さしあたりまず個々の工場における労働組織上のあたらしい現象としてとらえることができる。工場生産のすべての運動は、労働者の側からではなく自立化した機械の側からはじまり、全過程は機械体系に主導され、機械体系の運転の停止とともに終わる。このことは、工場生産では「労働過程を中断することなしにたえず人員交替をおこなうこと<sup>(5)</sup>」を可能にするのであるが、工場労働の質的均等化が発展すればするほど「その非常な簡単さのために、この労苦をしょわされた人員が短時間ごとにたえず交替する<sup>(6)</sup>」可能性はいよいよ大きくなる。

しかしマルクスは、労働転換への法則的傾向を個々の工場内部の労働組織のうえにだけあらわれる現象として認識したわけではなかった。むしろマルクスにおいては、機械制大工業による社会的生産の完全な支配がけっきょくにおい

て社会的労働の組織原理を分業から労働轉換のうえに移行せしめるものとかんがえられており、したがって労働轉換法則の本領はたんに個別的労働過程における「仕事の交替」にあるのではなく、総体としての社会的労働組織を規制するまったくあたらしい原理であるという点に、すなわちそれが「一般的な社会的生産法則」であるという点に存するものとして把握されているのである。

大工業の発展が「ひとりの人間の全身を一生涯ひとつの細部作業にしばりつけるマニュファクチュア的分業を技術的に廃棄する<sup>(9)</sup>」ことを論証したのち、マルクスはさらに、「作業場のなかでのマニュファクチュア的分業についていえることは、社会のなかでの分業についてもいえる<sup>(10)</sup>」とのべている。なぜなら、大工業の革命的本性は、手工業やマニュファクチュアにおける保守的・閉鎖的技術（それは人々にたいしてかれら自身の社会的生産過程をおおいかくし、自然発生的に分化した生産部門をたがいに他にたいして謎にする）のヴェールをひきはがして、自然諸科学の大規模な意識的应用によるたえまない技術革命を社会的生産全体におしおよぼし、生産および労働の社会的性格をつよめ、企業や部門や地域などの断面での社会的労働の旧来の手工業的結合を根底からくつがえさずにはおかないからである。ここからマルクスは、ひとつの決定的な結論をひきだしている。

「近代工業は、生産の技術的基礎とともに労働者の機能や労働過程の社会的結合をもたえず変革する。したがってまた、それは社会のなかでの分業をもたえず変革し、資本のかたまりと労働者の群れとをひとつの生産部門から他の生産部門へとたえまなく投げ出し投げ入れる。したがって、大工業の本性は、労働の轉換（Arbeitswechsel）、機能の流動、労働者の全面的可動性を必然にする<sup>(11)</sup>」。だから「大工業は、労働の轉換、したがってまた労働者のできるかぎりの多面性を一般的な社会的生産法則として承認し、この法則の正常な実現に諸関係を適合させることを……生死の問題<sup>(12)</sup>」たらしめ、「変転する労働要求のための人間の絶対的利用可能性をもってくることを、すなわち、ひとつの細部機能の担い手にすぎない部分個人のかわりに、種々の社会的機能を自分の種々の活動様式としてかわるがわるおこなうような全体的に発達した個人をもってくることを、ひとつの生死の問題にする<sup>(13)</sup>」。

「機械と大工業」の章でマルクスが追求した労働轉換法則は、およそ以上に要約したような論理構造をもつものといえる。それは、あらたな生産様式としての大工業が社会的労働組織のうえにおしつけるあらたな原理＝法則であるとともに、社会的生産の主体たる生産的労働者を人格的分裂から救いだして、全体

的に発達した普遍的個人に転化するための物質的根拠をしめすものでもあった。しかし、いうまでもないことであるが、資本のもとに包摂された機械制大工業は、それ自体ひとつの自己矛盾であって一面では労働者の全面的可動性と人格の普遍的発達への必然性と可能性をうみだすが、他面では、資本の直接的利益が労働者の人格の分断と非人間化による資本への隷属を要求するかぎり、マニュファクチュア型の分業をたえまなく「体系的にもっといやな形で<sup>(9)</sup>」再生産せざるをえない。マニュファクチュア労働者がたったひとつの部分道具をあつかうことを終生の専門とするのにたいして、工場労働者はひとつの部分機械につかえる以外にはなにごともしえない非人格的部分品に転落させられている。しかも、工場生産の発展とともに労働力の再生産費が低下し、それによって工場と資本への労働者の「絶望的従属」が完成されるのである。それだけではない。資本関係のもとでは、直接的生産過程の内部での頭脳労働と肉体労働との分離過程（この過程は、物質的労働と精神的労働との全社会的分裂を基盤としつつ、単純協業においてはじまりマニュファクチュアにおいて発展したものであるが）が「大工業において完結<sup>(9)</sup>」するのである。要するに、資本は、労働の転換と普遍的個人の形成を自己の死命にかかわる問題として提起しはするが、しかしそれを社会的生産全体を根底からとらえる一般法則として現実化することはできないのである。

かくしてマルクスは、労働転換法則が分業法則を完全に駆逐し、労働者の人格の普遍的発達の基礎となるためには、なによりもまず「労働者階級による政権の奪取<sup>(9)</sup>」という体制的条件が前提されると指摘することをわすれなかつたのである。分業を廃棄するためには、まずもって資本が廃棄されなければならない。じっさいわれわれは、ソ連邦においてずっと前に資本が廃棄されたことを知っており、「政権を奪取」した労働者階級が自らの手で自分の機械制大工業をつくりだしたことを知っており、共産主義建設の過程で大工業の技術的基盤を発展させ、それによって労働の性格と内容を変革し、共産主義社会にふさわしい労働組織と社会的諸関係（物質的、イデオロギー的、精神的諸関係）を意識的・計画的につくりだすべく努力しているのを知っている。まさにこうしたことを背景として、こんにちソ連邦において、分業の廃棄と人間個性の普遍的発達をめぐる科学的・哲学的討論がいつにもまして盛行するようになったのであり、共産主義的な労働組織を探求する広範な社会学的調査研究がおこなわれるようになったのである。

われわれはのちに、ソ連邦における社会主義的労働の実例によって労働の転

換と結合にもとづくあらたな労働組織のいくつかを観察してみたいとおもう。しかし、そのためには、労働転換法則についての前述のマルクスの把握にとどまるわけにはいかない。ここで基本的すじみちを追って要約した機械制大工業の本性と労働組織上のあたらしい原理との対応は、主として前世紀60～70年代までのイギリス大工業の事実的材料にもとずいてひきだされたものであった。つまりこんにちからみれば、マルクスの当面したものは、機械制大工業の発展の初期段階にすぎない。ここ一世紀のあいだに大工業は、その技術的基盤においても労働組織の面においても、まったく相貌を一変してしまった。マルクスの時代にはエレクトロニクスやサイバネティクスのような現代的科学技術の奇蹟はその兆候さえみとめられなかったし、電氣的技術や化学的過程の産業的応用すらまだほとんど存在しなかったのである。だから、労働転換法則についての前述の諸結論をこんにちの時点で再確認しうるためにも、またそれにもとずいて人間的労働の（したがって人間の）普遍的発達における大工業の世界史的役割を認識するためにも、現代的生産技術（とりわけ労働手段）の骨格と発展方向をあきらかにし、それが労働および労働組織のうえにおよぼす影響を考察してみなければならない。

- (1) わずかに内田義彦教授の近著「資本論の世界」（岩波新書、1966年）でこの法則のポジティブな意味が事実上指摘されているのが注目される（150～159ページをみよ）。なお§2の内容はすでに「経済研究」（一橋大学経済研究所）第17巻第4号に「労働転換法則について」と題して発表したことがある。
- (2) K・マルクス「資本論」，大月書店，国民文庫，第3分冊，106ページ。
- (3) 同，153ページ。
- (4) 同，125ページ。
- (5) 同，115ページ。
- (6) 同，50ページ。
- (7) 同，113ページ。
- (8) 同，114ページ。
- (9) 同，113ページ。
- (10) 同，125ページ。
- (11) K・マルクス「経済学批判要綱」，大月書店，第Ⅲ分冊，652ページ。
- (12) 「資本論」，前出，第3分冊，183ページ。
- (13) 同，184～185ページ。
- (14) 同，183ページ。
- (15) 同，185ページ。

- (16) 同, 287ページ。
- (17) 同, 289ページ。 マニユ型分業と社会内分業との質的區別についてのマルクスの分析に眼をうばわれて両者の分業としての共通性がしばしばみうしなわれる。だが、資本の生産力体系の内部での両者の地位と役割の相違という問題（これこそ「資本論」における分業論の眼目であろう）と人間の社会的経済的發展における分業の地位・役割という問題とは直接おなじではない。ここに引用した1句のほかにもたとえばマニユファクチュア分業が「すでに社会に存在していた職業の自然発生的な分化を作業場のなかで再生産して、これを組織的に極度にまで進めることによって」（同, 51～52ページ）作りだされる、という指摘がある。ここには両分業形態の内的（歴史的、論理的）連関にたいする把握がみられる。
- (18) 同, 291～293ページ。
- (19) 同, 186ページ。
- (20) 同, 87ページ。
- (21) 同, 293ページ。

### § 3 現代的労働手段の発展の論理

前世紀80年代以降における大工業技術の変革過程は、まず電気エネルギーの産業的利用によってきりひらかれた。すなわち社会的生産の電化、とくに主要動力源としての電気エネルギーの応用によって従来の機械体系——それは動力機と作業機との個別的な（あるいは工場内でのようにせいぜい集団的な）統一を形成していた——の技術的統一がうちこわされ、エネルギーの生産と供給は独立の産業部門に転化したのである。多くの作業機と動力中枢との個々の直接的依存関係（それはかつて蒸気動力によりうちたてられたものである）は、機械体系にとって固有のものではなくなった。電力が工業的エネルギーとして比類ない特性をもつことは、いうまでもない。電力は「もっとも大量的で可動的な、かぎりなく細分することもできれば、任意の量によせあつめることもできるエネルギー<sup>(1)</sup>」であり、「たやすく遠距離に送達され、製造工程がもっとも正確に、迅速に、集約的になされるように保障<sup>(1)</sup>」するエネルギーである。電気エネルギーの工場外部からの供給が、工場生産の内部の技術工程の分化や作業機の専用化をうながしたのはそのためである。しかし、このような大工業技術への電力の変革作用にもかかわらず、機械体系の3環構成そのものはすこしもそこなわれなかったばかりか、むしろ個々の作業機が個々の電動装置と直接結合されることによって、機械体系全体を3環機構の複合体に転化したので

ある。電化の変革作用はむしろ、作業機の大規模な専用化をうながすことによって、工場制度の「職区形態」から「流れ作業形態」への全面的移行をもたらした点にある。電力導入以前の工場生産は、中央動力装置と作業機と伝動機構との技術的統一にもとづく「職区形態」（同種機械の単純協業）が支配的であり、どんな大規模な工場も多少とも同種の作業機を集中した「職区」の複合体として形成されていた。このばあい、ある職区と別の職区との生産上の連関はかならずしも技術的必然性にもとづいて形成されているのではなく、各職区における機械体系の外延は職区の枠によって限界づけられていた。個々の工場は、たとえば旋盤は旋盤職区へ、穿孔機は穿孔職区へ、紡績機は紡績職区へという形で組織されていた。ここでは3環機械体系の各環の依存関係は個々の職区の枠内で実現されざるをえず、そのために作業機専用化の可能性もまた制限されていたのである。むしろ作業機専用化の制限こそが同種作業機の集中と協業化にもとづく職区的生産組織を要求したものである。

電化による作業機専用化の発展が、微細な部分の製造にいたるまでの専用機械をうみだしたとき、全製造工程の技術的連続性にもとづいて組織されるあらたな工場生産形態（＝流れ作業生産）による職区的工場組織の駆逐がはじまった。専用作業機は、もはや「同種」標識によって集中されるのではなく、技術工程のうえでの相互連関の標識によって（すなわち「異種」標識によって）集中され、したがって全生産工程は、異種作業機の分業にもとづく「流れ作業」方式のもとに組織されることになる。工場生産の「流れ作業」形態においては、多能汎用機械にかわって単能専用機械が生産の骨格を形成し、ベルトコンベアによって連結された全技術工程の連続性と律動性のうちに「機械の協業・分業」が実現される。ここでは、全工場が外部から動力の供給をうける自己運動装置に転化するのであって、従来相対的に孤立し専門化されていた各職区のあいだの技術的隔壁がとりのぞかれており、これに対応して労働と労働組織のいっそうの社会化（直接的協業の量的拡張と質的深化）が達成される。

発展した機械経営における「異種」機械の分業組織が労働組織のうえにおよぼす変革的意義については、すでにマルクスの洞察しえたことである（前項をみよ）。工場生産の「流れ作業」形態においては、生産手段の集積、集中、巨大化、技術工程の細分化と連続性、斉合性、計画性など、一言でいえば大工業的技術の社会的本性が全面的に開展するのであり、その結果一方では、巨大な生産有機体として客体化した生産過程にいっそう大規模な協業労働として組織された全体労働者が結合されるが、他方では、極度に単純化された労働諸

機能（といってもここではもっぱら遂行機能が問題である）によって骨化した職種の細分そのものが存立しえなくなり、労働転換法則の広範な恒状的作用が必然ならしめられる（資本主義的に組織された「流れ作業」生産のもとでは、労働の単純化と転換とがどんなに非人間的なやり方で労働者におしつけられるかは、名画「モダンタイムス」によってみごとにえがかれている）。工場生産の「流れ作業」形態のもとでは、自然諸科学の大規模な産業的利用にもとづく不断の技術革命によって大工業生産のダイナミックな発展局面がきりひらかれる（製品の構造と型、原材料の選択範囲、加工、組立、分割と結合、分折と合成の方法などがたえまなく改変される）。このダイナミズムこそは、20世紀的工業に固有のものである。自動車、航空機、トラクター、コンバイン、機関車、船舶、発電機、ボイラー、衣服や家具、建築物、有機合成物資、精密機器や動力装置、等々——これらすべての現代的工業製品は、その物理的耐用期間が比較的ながいにもかかわらず、社会的・経済的（いわゆる道徳的）寿命ははなはだみじかい。とりわけ生産手段の社会的・経済的短命ぶりは、「きのうカットされたものがきょうはプレスされたり、スタンプされており、きのう鋳でとめられたものがきょうは熔接される<sup>(2)</sup>」という具合に、原材料の範囲、製造方法などの短時日の転変のうちにみごとにあらわれる。そしてこうした現代的生産技術の加速的転変が経験的方法の蓄積を時間的に許容しえない点に達するとき、生産的労働の科学的労働への、そして物質的生产そのものの科学的生産への転換がいやおうなしに促迫されるのである。

マルクスによって「科学の直接生産力化<sup>(3)</sup>」とよばれた大工業技術に固有のひとつの特質が、「流れ作業」生産のなかでしだいに発展の主要契機となる（もっともこの過程は、大工業生産のオートメ化段階にいたってはじめて全面化し、完了するのではあるが）。科学技術的創造の直接生産力化は、直接生産過程の内部における生産的実践と結合しつつ、また技術的試作活動をつうじて、いよいよ大規模に実現される。科学技術的創造はもはや大学や学術研究機関の枠をこえて直接生産部門に入りこみ、生産そのものを科学的生産に転化しはじめる。「科学の生産力化」と「生産の科学化」とはあいともなって発展する。そして大工業生産のあたらしい内的矛盾（この矛盾の克服によって大工業生産の最高の発展局面たるオートメ化段階が到来する）もまたここに杯胎するのである。

工業生産の「流れ作業」形態が、生産と労働との直接社会的性格をつよめることによって資本主義的諸関係とのあいだにするどい対立をつくりだすこと

は、いうまでもない。個別資本の社会的資本への集積・集中や巨大株式会社の普及にはじまり、私的・国家的・国際的独占団体の形成にいたる資本関係の自己止揚的再編そのものが、大工業生産のあらたな発展局面がうみだすふかい矛盾の一定の解決形態であり、「対立的形態における私的所有と私的労働との廃止<sup>(4)</sup>」であるということ、そしてとどのつまりこの矛盾こそが資本独占そのものの廃棄によって解決されるものであることもまたあきらかである。しかしこの種のいわば「体制的矛盾（というのは、それが資本によっておこなわれる生産に固有の普遍的矛盾であるからだ）を度外視しても、大工業の「流れ作業」生産形態のうちには重大な内的矛盾が伏在している。すなわち、「流れ作業」生産は、一方で加速的テンポをもって開発される科学技術的創造の直接生産力化としてあらわれるが、他面では単能専用機械の分業体系の形で巨大な生産装置のうちに骨化するこの生産形態そのものが科学技術的創造の直接生産力化をさまたげるのである。たとえば、「流れ作業」生産においては製品の構造と製造工程のわずかな改変がたちまち巨大な生産装置全体の構造変化を惹起せずにはおかないし、鋼材やコンクリートによって固定された生産用建築物、複雑な専用作業機の体系そのもの、作業機の連結機構、等々のうちに確立された既存の調和がたえまなく破壊されてしまう。製造工程の変化が既存生産手段の代用によって間にあわせられたり、あるいは全生産装置の更新が可能となるまで新製品の開発が中止されたりするいわゆる「導入の困難」とは、「流れ作業」生産に固有の矛盾——科学の生産力化と骨化した生産装置との矛盾——のあきらかな発現である。このように、体制的条件（私的資本の利害）を別としても、「流れ作業」段階にある大工業生産は、その技術水準が科学技術的創造からたえずたちおくれるという重大な矛盾をはらんでいるのである。

問題は、「流れ作業」生産においては機械体系の3環構成が維持されているばかりか、作業機の単能専用化によって技術工程が細分される結果、生産装置の機能上の弾力性・屈伸性が極度に制限され、科学技術上のあたらしい成果の導入がはなはだしく阻害される点にある。かくして、大工業生産の「流れ作業」形態が克服されなければならないとすれば、それによってきりひらかれるあらたな発展局面において大工業技術は、なによりもまず、科学技術的創造がしめすいっさいのヴァリエーションをたえまなく受容し、直接的生産力に転化しうるような能力、いいかえれば主として作業機械の構造的弾力性と名づけられるような技術的属性を獲得していなければならないことになる<sup>(5)</sup>。作業機の技術的弾力性・屈伸性は、かつて単能専用作業機によって駆逐された多能汎用機

械（あるいは普遍的<sup>ユニヴァーサル</sup>機械）がもともと具有していた属性ではあるが、ここでは問題となっている技術上の変化がいかなる意味においてもふるい汎用機械への逆行でないことはいうまでもない（こうした逆行はただ大量生産の否定によってのみ可能であろう）。生産の大量性を保持しつつ作業機の構造的弾力性と機能的屈伸性をつくりだすためには技術上のある種の飛躍が必要であり、この飛躍は、作業機複合<sup>アグリガート</sup>の出現によって準備され、3環構成から4環構成への機械体系自体の移行によって実現される。各種作業機の複合体としてのアグリガートにおいては、産業技術発展の全成果（作業機の単能専用化と技術工程の細分化）が維持されると同時に、作業機の普遍的（多能汎用）機能が復活する。たとえば並型穿孔機のヘッドは加工されるべき部品の配列と形状に適合するように組合せられているが、この穿孔機のボディが多方向にすべるように改変されただけですでにきわめて大きな機能上の屈伸性をあたえられるのである。こうした技術的弾力性をうみだす作業機の屈伸的性格は、さらに全属加工のあらゆるオペレーション——たとえば切削や研磨など——におよび、さらにプレス機械にも波及する。一般的にいえば、自動アグリガートにおいては、労働対象が変化するのに応じて、製品の種類や型に応じて、作業機ヘッドの多様な結合と組合せが可能であり、機能的構造の変更から生ずる工程の多様なヴァリエーションの範囲内で作業機能の普遍性が現出するのである。もっとも、アグリガートは、ある特定の時点、特定の工程にかんしては単能専用作業機の体系であり、「流れ作業」工場において頂点に達する生産の大量性、高速性、律動性をみずからの属性としていっそう高いレベルで保持している。だからアグリガートはむしろ、単能専用機能および普遍的機能という相対立する2つの機能を統一的に具有しているのであって、この統一にもとずいて巨大化した生産有機体と科学技術的創造のダイナミズムとのあいだの前述の矛盾を克服する可能性をあたえられているのである。機械的技術のこうした発展段階が工場労働の性格と内容および労働組織のうえに深刻な影響をあたえることはあきらかである。アグリガートがある意味において「機械の分業」を止揚するとすれば、労働者の側での労働諸機能の相互転換はさらに労働諸機能の統合へとすすまざるをえない。しかしこのばあい重要な変化は、労働諸機能における知的・精神的要素の比重の上昇であろう。各種肉体労働のあいだの機能の転換と結合にくわえて、肉体労働と頭脳労働のあいだの機能の転換と結合がいっそう決定的な意味をもちはじめると。生産そのものの科学化は、必然的に労働のインテレクチュアリゼーション、労働者の技師化を結果せずにはおかないし、ここにいたって普遍的

(科学的) 労働による直接的労働の駆逐（これは、大工業生産の本質に由来する傾向として、すでにマルクスによって指摘されたところであり、またマルクスはこの過程のうちに交換価値に立脚するいっさいの生産形態が止揚される究極の根拠をみていたようである<sup>(6)</sup>) が全面的に開始される。もちろん資本の利益はつねに労働者の人格の普遍的発達にとっての壁であり、資本主義的工場における肉体労働のインテレクチュアリゼーションは資本にとっての必要悪として最少限にとどめられるし、そのためにこそ技師・熟練労働者群は資本に奉仕する産業下士官へと転化されるのである。しかもこうした「体制」的条件を度外視しても、自動アグリガートそのものの機能的構造が大工業技術の原理的基盤（機械体系の3環構成）のうえに立っているかぎり、労働の性格と内容における本質的変化（直接的労働の普遍的・科学的創造活動への転化）が全面的に惹起されることはない。ただ自動アグリガートにおける構造的弾力性と機能的屈伸性をつうじて実現される科学技術的創造の大規模な導入が、大工業技術の3環構成から4環構成への移行を準備しなすとげるときにだけ、人間労働の根本的変革もまたはじまるのである。

こうしてわれわれは大工業技術の発展の最高段階たる4環機械体系に到達する。機械体系の4環構成とは何か？ それは、動力機——伝動機構——作業機からなる機械の3環体系のうちにあたらしい第4の環——管理・制御の環——が導入されることによって形成される。もちろん、管理・制御機構の技術的応用そのものは、古代エジプトの神殿の自動開閉扉をあげるまでもなく、歴史上多くの事例が知られている。マルクスは、「たった1本の糸が切れても紡績機をひとりで止める装置や、梭の糸巻きの横糸がなくなればすぐに改良蒸気織機を止めてしまう自動停止機<sup>(7)</sup>」を自動制御機械として理解している。しかしまたマルクスは、こうした個々のオートマートの散在的使用がいぜんとして労働者（の操作）を必要とするかぎり、まだ機械体系の根本的変化の前兆ではあっても根本的変化そのものではない、という認識をもっていたようである。

「作業機が原料の加工に必要なすべての運動を人間の助力なしでおこなうようになり、ただ人間の付き添いを必要とするだけになるとき、そこに機械の自動体系が現われる<sup>(8)</sup>」という定義がそれを物語っているようにおもわれる。要するに管理・制御機構の導入が散発的、部分的であるかぎり、機械的労働手段の原理的変革は問題にならないのである。管理制御機構がたんに既存の機械体系の個々の成分や技術工程の個々の段階だけをとらえるのではなく、統一的全体としての機械体系のすべての部分、技術工程のすべての段階をとらえる基本的

鎖環としてくみこまれるとき、機械体系の3環構成から4環構成への移行が実現されるのである。この移行そのものが、サイバネティクスの名でよばれる科学の最新分野の成立を契機としてなすとげられたこと、後者はまたエレクトロニクスと機械数学の発展の所産であること——これはこんにち周知のことである。かつて大工業生産の「職区」形態から「流れ作業」形態への移行をまねいた生産のエレクトリフィケーションは、その極点たるエレクトロニフィケーションにいたって大工業技術の本質的な構造変化を結果する。生産の電化がたんにエネルギー面での変化と3環機械体系の枠内での技術的・組織的变化をともなったのにたいして、生産の電子工学化は主として弱電技術に立脚する通信・管理・制御のメカニズムを生産技術の不可欠の成分たらしめることによって直接的生産要因としての人間労働を一掃するといういっそう根本的な変革を惹起するのである。エレクトロニクスは、フィードバック体系を技術的に利用する広範囲の可能性をきりひらき、生産技術上の無数のヴァリエーションに対応しうる技術学的ヴァリエーションを一定のシェーマのうちにくみこむことによって電子的管理制御機構（計算決定機械あるいは計算モデル化機械）を創造するのである。かくして機械の4環体系は、みずからの作業工程を決定するプログラムを自動的にモデル化し、訂正し、補足しうるのであるから、すでに十分の権利をもって「自動制御」機械と称することができよう。4環機械体系としての自動制御機械こそは、今世紀50年代以降きりひらかれた大工業のあらたな発展局面たるオートメ化生産の技術的基盤なのである。

---

われわれはまず、マルクスが19世紀的大工業のうちに洞察した「労働転換法則」とその人間変革的意義を再確認し（§2）、ついで現代的生産技術の発展の論理を追跡してみた。これまでの考察をひとまず要約すれば、つぎの3点がうかびだしてくる。

(1) 機械制大工業においては、客体的生産諸条件の集積・集中によって生産過程が労働主体から相対的に自主化した客観的過程に、したがって生産有機体が客観的有機体に転化するということ、この客観化された物質的生産の内部で人間と自然（労働者と労働対象）とのたえまない「疎隔化」が進行するということ。

(2) 物質的生産のこうした客観化過程は一方で巨大な客観的生産有機体の無

限の分割と専門化をともなうが、同時に主体の側での労働分割の廃棄、自由な労働の転換と結合、それをつうじての生産的労働者の直接社会的結合と個性の多面的発達を不可避免的に要求するということ。

(3) オートメーションの名とむすびついた現代的生産技術は科学的生産としての大工業の本性を全面的に展開するということ、したがってオートメ化生産の技術的手段は人間労働における肉体的（遂行およびエネルギー）諸機能を吸収するばかりでなく、知的・精神的（したがってもっとも創造的）な人間の諸機能をもたえまなく客体化することによって、「人間の助力」を不必要ならしめる、ということ。

ところで「人間の助力なしに」（マルクス）実現される生産とはどういうことであろうか？ これが物質的生産からの人間の排除というような意味でないことは、ことわるまでもない。諸個人の対象的活動、人間と自然との物質代謝のうちこそ、人間の人間たるゆえん（動物界との区別）、人間の存立と発展の絶対的基盤がある。主体の欠けた物質的生産、人間的活動と無縁の労働手段ということは、労働対象なしの労働者とおなじようにナンセンスであろう。そこでわれわれは、人間の問題にたちかえらなければなれない。すなわち、オートメーションの名とむすびついている大工業技術の最新の発展局面は人間労働の性格と内容および社会的労働の組織編成のうえになにをもたらすのか？ 人間存立の不変の絶対条件たる生産的労働が生産諸力の全体系のなかで獲得するあらたな地位と役割はどんなものか？ という問題である。われわれはこの問題をのちにとりあげる。共産主義のもとでの「分業の廃棄」あるいは「普遍的個人の形成」というわれわれのテーマに、いっそうひろくかつ根源的な立場から接近するためには、この問題をさけるわけにいかないからである。

- (1) Политическая экономия, учебник. Академия Наук СССР, 4 изд. 1962, стр.662 (邦訳, 合同出版, 第4分冊, 999ページ)。
- (2) Б·Шенкман, О некоторых основных тенденциях развития средств труда, в кн. Проблемы политической экономии, 1959, стр.85 シェンクマンによれば、従来の万能的な「技術ハンドブック」は、それを作製するのに要する時間がそれが役にたつ期間よりもながいという意味で、まったく歴史的遺物になってしまったということである。
- (3) 「固定資本の発展は、一般的社会的知識 (Wissen, Knowledge) がどの程度まで一般的知性 (general intellect) の支配下にはいったか、この知性にしたがってどの程度まで改造がおこなわれたか、をしめしている」（「経済学批判要綱」、前出

第Ⅲ分冊 655ページ)。

(4) 「資本論」, 前出, 第9分冊, 94ページ参照。

(5) Б·Шенкман, там же, стр.89

(6) たとえばマルクスのつぎのような叙述をみよ。「……大工業が発展すればするほど, 現実的富の創造は, 労働時間と充用された労働の量とに依存するよりも, むしろ労働時間中に動員される諸作用因<sup>マハト</sup>の力に依存するようになる。そしてこれらの作用因はそれ自身ふたたび……それらの生産に要する直接的労働時間に比例しないで, むしろ科学の一般的状態と技術学の進歩, またはこの科学の生産への応用に依存する。……労働者は生産過程の主作用因ではなくなって, 生産過程とならんで現れる。……生産過程の主作用因は, 人間自身が遂行する直接的労働でもなければ, 彼が労働する時間でもない……。直接的形態での労働が富の偉大な源泉であることをやめてしまえば, 労働時間は富の尺度であることをやめ, ……それとともに交換価値に立脚する生産は崩壊し, 直接的物質的<sup>マハト</sup>生産過程は, それ自身窮迫性と対抗性とをはぎとられた形態をうけとる」(「経済学批判要綱」, 前出, 第Ⅲ分冊, 653~654ページ)。

(7) 「資本論」, 前出, 第3分冊, 117~118ページ。

(8) 同, 117ページ。マルクスは, 技術にかんするノートの中なかで, 自動制御機械を「人間の助力をうけとらず, 与えられた課題を構成諸部分の組合せとそれに対応する運動によってなしとげる」ような生産体系であると定義し, 人間の「反作用がなんらかの点で必要だとしても, 生産そのものをたすけるためではなく, ただ偶発的な困難を除去するばあいだけである」とのべている。(См. Большевик, No.1~2, 1932, стр.18, Цит. по книгу С.Товмасын «Труд и техника», 1965, стр.182~183)。